

平成 27 年度

海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）

採択プログラム事例集

–目次–

●双方向協定型

1. 東京外国語大学

「世界と日本をつなぐ、TUFS 双方向非英語圏学生交流プログラム」

●協定派遣（短期研修・研究型）

2. 亜細亜大学

「亜細亜大学アジア夢カレッジ-キャリア開発中国プログラム-（AUCP）」

3. 大阪教育大学

「フィンランド・スウェーデン等（EU）における海外教育実習プログラム-理数の CLIL 授業開発をととしたグローバルな教員養成をめざして-」

4. 国際基督教大学

「ICU 夏期留学プログラム」

5. 宮崎大学

「学士-修士一貫型グローバルな海洋科学技術者育成プログラム」

●協定受入（短期研修・研究型）

6. 神戸大学（代表校）、大阪大学

「大学の世界展開力強化事業 I（ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成）」

7. 広島市立大学

「Intensive Summer Course HIROSHIMA and PEACE (H&P) 2015」

8. 北海道情報大学

「Web デザインコンテストによる技術・文化の相互啓発で育つグローバル人材」

大学等名 東京外国語大学

プログラム型 **双方向協定型** / 協定派遣（短期研修・研究型） / 協定受入（短期研修・研究型）
（いずれかに○）

プログラム名 世界と日本をつなぐ、TUFS 双方向非英語圏学生交流プログラム

プログラムの概要（平成 27 年度実績見込）

プログラム実施期間 （1 回の派遣／受入にかかる主な期間）	[派] 平成 27 年 4 月～平成 29 年 1 月（約半年～1 年間）、[受] 平成 27 年 4 月～平成 28 年 7 月（約半年～1 年間）（春・秋の 2 回受入開始）
主な派遣先／受入国・地域（上位 3 カ国）	[派] ドイツ、フランス、ロシア [受] 中国、ドイツ、イタリア
主な派遣／受入校（上位 3 校）	[派] マールブルク大学、パリ第三大学、韓国外国語大学 [受] 廈門大学、ハンブルク大学、ローマ大学 ラ・サピエンツァ
プログラム全体の参加者数	[派] 137 人 [受] 124 人
海外留学支援制度奨学金受給者数	[派] 89 人 [受] 100 人
参加者の所属（在籍大学における学部・研究科・専攻／課程・学年）	[派] [受] 全学部U2～4 年・全研究科M1～2 年
プログラム内容（講義／研究／実践等）	[派] 講義 [受] 講義
プログラムのウェブサイト	[派] http://www.tufs.ac.jp/studyabroad/ [受] http://www.tufs.ac.jp/intlaffairs/exchange_in/program/

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

趣旨・目的：本プログラムは、世界の言語・文化・社会を学ぶ東京外国語大学の学生を、専攻する言語を用いた教育が行われている世界の中核大学92校に派遣すると同時に、同地域から学生を受入れるものである。対象は、非英語圏の諸国である。これにより、双方で地域言語の学修、地域理解の促進をすすめ、世界の将来を見据え、日本の発展に貢献する人材を養成する。

達成目標：本プログラムでは、非英語圏協定校と学生交流を行う。比較的留学の可能性が開けている英語圏に比べ、非英語圏への留学は地域言語の重要性から困難が伴うが、本学は、アフリカ、中近東、南アジア、東南アジア、東アジア、中央アジア、ロシア、ヨーロッパ、ラテン・アメリカ地域の言語・文化・社会の教育・研究を根幹に据えているため、非英語圏の地域に多くの学生が留学している。本プログラムにより、これらの地域の協定校へ、当該地域の言語・社会を学ぶ本学学生を派遣する。一方、これらの地域で日本を学ぶ、あるいは日本で学ぶことを希望する学生を受け入れ、本学学生との共学を行う。これにより、真の双方向交流を実現する。

特徴： ① 本プログラムの対象国は、世界の 42 国である。これは、本学が長年にわたって築いてきた世界諸地域の大学との学術交流の強い絆を基礎としている。

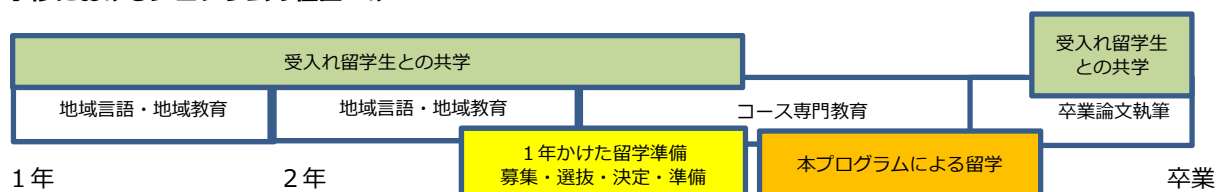
② 本プログラムと連動して行われる英語圏プログラムと合わせ、1 学年 750 名の 20%が半年～1 年の留学に参加する。

③ 派遣学生は、派遣先において、現地の言葉による専門的な授業を受講する。日本人は自分だけ、ということも多く、タフな人材が養成される。本学は派遣先での学習を評価し、地域言語科目や専門科目として単位認定を行う。

④ 受け入れ学生は、本学で出身地の言語を学ぶ学生等と交流する。本学の IJ 共学は本プログラムの基礎の上になりたっている。

⑤ 危機管理を含め、手厚い留学支援が提供されている。

4年の学修におけるプログラムの位置づけ：



2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

参加者の学習成果の評価の方法：

学生自身による自己評価

- ・レポート提出
- ・留学体験報告書の作成
- ・「留学説明会」での報告による振り返り。意識の変化の把握。

派遣先大学による評価

- ・単位取得に関する証明書の発行
- ・担当教員間の密な連絡による、評価の伝達
- ・共同指導体制

本学による評価

- ・派遣先での学修を評価し、適切な科目での単位認定
- ・語学力については外部試験受験の奨励（試験制度のある場合）
- ・指導教員による成果の総合評価
- ・IRオフィスによる、留学プログラム参加・不参加の比較。就職先との関連性の調査。

今後：それぞれに行われている評価を一本化し、総合的な評価を行う。また、学生への効果を踏まえ、プログラムとしての発展性を検討する。

フォローアップ：

派遣：報告会・説明会

- ・留学体験報告書のホームページでの公開
- ・参加者インタビュー動画の作成、上映会やホームページへの掲載
- ・学生企画による、Study Abroad Fair の開催支援

受入れ：成果の確認

- ・協定校との密接な連携による、評価の連絡、共同指導体制
- ・プログラム終了レポートによる自己評価
- ・満足度アンケートによる学生によるプログラム評価の実施
- ・協定校を通じ、帰国後も引き続き学生とのネットワークを維持

他大学への波及

- ・留学支援共同利用センターのノウハウの他大学への提供
- ・安全対策・留学支援対策ノウハウの他大学への提供

今後：プログラムを発展的に拡大していくため、参加学生のフォローアップや、広報活動をさらに充実させる。

プログラムの将来像：

世界各地の協定校と協働する

- ・大学の戦略に基づき、さらなる広汎な国際パートナー網を構築する。
- ・とくに、アジア・アフリカ地域の協定校を増やし、日本との交流を支える。
- ・核となる協定校にGloabl Japan Office を設置し、協定校の日本教育・日本語教育を支援する。

4年の教育に不可欠な留学とする

- ・1、2年次の短期海外留学と、本プログラムを連動させ、4年間の教育に留学を組み合わせる。
- ・全学教養日本力プログラムによる留学前教育を強化する。
- ・帰国後の単位認定を確実に実施。
- ・帰国後の語学外部試験受験を拡大する。

日本のグローバル化に資する

- ・Gloabl Japan Office を他大学にも開放し、日本への留学・日本からの留学を支援する。
- ・万全な留学支援体制のノウハウを他大学に提供する。

今後：協定校を毎年8校程度、増加させ、新規の協定校との間に本プログラムを拡充。留学を含む4年間の教育を実現。留学実施・支援のノウハウを他の大学にも提供する。

大学等名 亜細亜大学

プログラム型 双方向協定型/協定派遣(短期研修・研究型)/協定受入(短期研修・研究型)
(いずれかに○)

プログラム名 亜細亜大学アジア夢カレッジキャリア開発中国プログラム-(AUCP)

プログラムの概要 (平成 27 年度実績見込)

プログラム実施期間 (1 回の派遣/受入にかかる主な期間)	[派]平成 27 年 8 月～平成 28 年 1 月 (約 5 か月間)
主な派遣先/受入国・地域 (上位 3 カ国)	[派]中国
主な派遣/受入校 (上位 3 校)	[派]大連外国語大学
プログラム全体の参加者数	[派]11 人
海外留学支援制度奨学金受給者数	[派]9 人
参加者の所属 (在籍大学における学部・研究科・ 専攻/課程・学年)	[派]全学部 U2 年
プログラム内容 (講義/研究/実践等)	[派]講義、演習、インターンシップ
プログラムのウェブサイト	[派] http://www.asia-u.ac.jp/academics/yume/

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

平成 16 年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)」に採択され、平成 24 年度に新たに採択された「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援(特色型)」の一環でもある本プログラムは、経営学部経営学科・経済学部・法学部・国際関係学部の参加希望者の中から、教職員による書類選考・面接の上、受講者を選考し、一定の要件(各学年開講の必修科目単位取得、中国語検定試験 3 級取得、良好な健康状態)を満たした学生のみが大連外国語大学漢学院(中国・大連市)への留学及びインターンシップに参加することができる。

現地では、①「中国の仕事と生活(2 単位): 現地日系企業支店長クラスによるオムニバス講義」②「海外ビジネス・インターンシップ(4 単位)」③「中国語(10 単位)」④「知の探検-中国の伝統と文化-(2 単位)」計 18 単位を取得し、卒業要件に算入される。インターンシップでは、現地日系企業を中心に展開をしており、終了時には「人事考課」及び「My before-after sheet」による評価を行い、成績算出の際のデータとするなど、学生のキャリア意識の向上を図る。

本プログラムの達成目標は、留学先での授業やインターンシップ、現地学生との交流などを通じて、①参加者の語学力の向上、②日本以外の世界の文化を受容し国際社会で活躍すべく異文化理解力・受容力の涵養、③本学の建学精神である「自助協力」を具現化する学生の主体的な取り組みによる自己の再発見・成長、である。特に語学面では、留学中は HSK4～5 級の取得を目標とし、留学後は中国語検定 2 級の取得を目指し、派遣先大学及び本学の教員より、厳しい指導が行われる。

本プログラムは 2 年次後期の 5 か月間の留学プログラムであるが、本プログラムに参加できる学生は、各学部所属しつつ、4 年一貫のキャリア開発プログラムである「アジア夢カレッジ」に所属する形式である。「アジア夢カレッジ」では、学生の能動的な学習を促す個別指導体制のもと、①アジアを舞台とする将来への明確な夢を描かせ、②ボーダーレスに展開する現代社会に必要な語学力を修得させ、③論理的な思考力、表現力、社会的関心、社会性などの基礎教育を徹底し、④さらに、＜アジア及びアジアの中の日本＞の認識と関連知識を修得させる教養教育や学部(経営学、経済学、法学、国際関係)の専門教育と、⑤広く企業や団体組織との連携を図りその人材と経験を積極的に活用した、従来の学問体系にとらわれない実学的な教育とを、体験学習に重点を置いて有機的かつ総合的に展開している。

2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

本プログラム「亜細亜大学アジア夢カレッジキャリア開発中国プログラム－（AUCP）」は、従来型の単なる語学留学の域に収まらず、習得した語学力をツールとして、インターンシップという「海外就業体験の場」で、異文化の中で働くことの重要性和意義を体得させるものである。それゆえ、本プログラムの趣旨等を理解している国内外企業の評価をプログラム全体の評価と位置付けている。

学生への評価項目として以下を設定し、「My Before After Sheet」を利用して、留学・インターンシップ前後の自己評価、インターンシッププログラム終了後の企業からの評価を得ている（各項目を以下の5段階で評価）。



左記5分野を具体的な能力要素(主体性、実行力、発信力など)に細分化、そのレベルを5段階とし、それぞれに行動指標を設定する。詳細は次のとおり。

※1「ビジネス・リテラシー」

- ①リーダーシップ力(主体性、達成志向、学習力、規律性・倫理観)
- ②問題解決力(課題発見力、分析的思考力、計画力、創造力)
- ③コミュニケーション力(状況把握力、説明力、交渉力、チームワーク力)

※2「グローバル・リテラシー」

- ④環境適応能力(異文化適応能力：異文化対応力、柔軟性、ストレス耐性)
- ⑤言語適応能力(聴く、読む、表現、書く)

※留学前と留学後のレベルの差(5段階の数値基準)が、具体的には留学期間を通しての成長度合いとなる。

<5段階の数値基準>

断片的レベル		標準レベル			創造的レベル
できない	言われればできる	言われなくても自ら行動をおこなったことがある	自分なりの工夫や努力をして発展的な行動をしたことがある	まわりを巻き込む創造的な行動を取ったことがある	
1	2	3	4	5	

インターンシップ受入企業にも左記の基準で職務状況进行评估してもらうことで、多くの場合、差異が生まれ、その際の原因こそが企業目線と学生目線の差異でもあり、その理由を学生たちに考えさせ、帰国後のキャリア教育や就職活動のアドバイスを行っている。

また、帰国後(毎年2月中旬)には「留学・インターンシップ成果報告会」を学内で開催し、特にキャリアに絞ったテーマ「インターンシップでの気づきと成長」、「今後の取り組み」について、プログラム全参加者に発表させている。成果発表会参加企業からは、各社の現状に照らし合わせて、学生に対し、グローバルに活躍する社会人として必要な能力、行動様式等に的確なアドバイスがなされている。

さらに、上記発表を通じて、プログラム内容全体に対する改善案等も出されており、「アジア夢カレッジ運営委員会」で検討した上で、次年度のプログラム運営に反映している。

本プログラムに参加した学生は、自身の経験に加え、上記の国内外企業からの評価を意識して本学での学修を継続しているが、本プログラムでの留学後に、さらなる海外経験を求める学生が多い。具体的には、国際関係学部にも所属する学生は、同学部で3年次に開講される「多文化インターンシップ」を履修し、夏季休暇期間にシンガポールにてインターンシップを行い、中国のみにとどまらない世界での経験をj得ている。さらには各学部にも所属する学生が、本学の交換・派遣留学生制度(AUEP)の選抜試験に合格し、中国語圏をはじめとして、約1年間の交換留学をしている。平成26年度に本プログラムに参加し、27年度にAUEPで留学している学生は、留学先都市でインターンシップ企業を開拓し、長期休暇期間等にインターンシップを行っている。27年度に本プログラムに参加した学生にも、28年度には同様あるいはそれ以上の海外経験が期待される。

AUEP及び「多文化インターンシップ」に参加すべく、国際関係学部の学生を中心に、将来のアジア圏での活躍を考えさせるために、教員が新しい環境を提供し、積極的に指導を行っている。また、本プログラムを経験した学生の多くがこのような連続的なプログラムを活用することにより、アジア圏で活躍することの意義、重要性を認識できるようになり、本学の私学としての設立趣旨である「亜細亜融合に新機軸を打ち出す人材を育成する」が達成される。

大学等名 大阪教育大学

プログラム型 双方向協定型 / **協定派遣（短期研修・研究型）** / 協定受入（短期研修・研究型）
(いずれかに○)

プログラム名 フィンランド・スウェーデン等（EU）における海外教育実習プログラムー理数の CLIL 授業開発をととしたグローバルな教員養成をめざしてー

プログラムの概要（平成 27 年度実績見込）

プログラム実施期間 (1 回の派遣/受入にかかる主な期間)	2 週間（訪問） 4 ヶ月（プログラム）
主な派遣先/受入国・地域（上位 3 カ国）	フィンランド スウェーデン
主な派遣/受入校（上位 3 校）	オーボ・アカデミー大学 ・ヴァーサ附属実習校（フィンランド） ユバスキュラ大学 コルテポッハ小学校（フィンランド） キューラビック基礎学校（スウェーデン）
プログラム全体の参加者数	12
海外留学支援制度奨学金受給者数	10
参加者の所属（在籍大学における学部・研究科・専攻/課程・学年）	実践学校教育講座（夜間大学院） 教育学部（小学校教員養成課程）
プログラム内容（講義/研究/実践等）	教育実習 訪問授業（科学・日本文化） CLIL 授業観察 CLIL 授業実践 教員研究交流
プログラムのウェブサイト	http://osaka-kyoiku.ac.jp/en/news/2014/1217.html (English) http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~nibujm/annai_20141220.pdf (Japanese)

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

本プログラムの目的は以下の 3 つである。1) グローバルコンピテンシーの育成、2) 他教科（例、理数、美術、体育、文化）の内容を英語で教える授業力の育成。プロジェクトでは、内容言語統合型学習（CLIL）の枠組みを活用し、4 つの C（Content, Communication, Cognition, Community）に焦点をあてている。CLIL はフィンランドで生まれ、最近 20 年間で発達してきたもので、ユバスキュラ大学の言語研究センターの研究者によって先導されてきた（本プログラムはユバスキュラ大学の連携も得て実施している）。言語をツールとして教科の内容を教え、グローバルコンピテンシーを育成する方法として EU、アジア、豪州等で広くもちいられている。

上記の目的を遂行するために、まず、大学教員が協働し（例、英語専門と科学専門）、次に、異なる教科を専攻している学生どうしがチームを組んで実践にむけた CLIL の英語指導案を創りあげる。これによって、訪問先の子どもたちは第 2 言語(英語)を用い、教科の内容について思考を働かせることができる。私たちはこの協働を、「3 層構造のアクティブ・ラーニング」と呼び、大学の教員、学生、子どもたちがこれに参観する。プログラムは概ね 4 ヶ月の取り組みである。選考されたメンバーは大学の「ランゲージチャットルーム」の語学クラスのサポートで英語の 4 技能を磨く。自主的なミーティングを毎週開き、大学教員の助言のもと、フライト日程や宿泊なども自分たちで計画を立てる。

学生は奨学金を日本学生支援機構より受けており、本プログラムは 4 年間続けて採択されている。また、事前・事後学習には HATO プロジェクト、実践学校教育講座から支援を受けている。

2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

プログラム参加者の評価

実習訪問授業では毎回省察を行い、事後は公開ミーティングやポスターセッションを行っている。成果は参加者がパンフレットとして作成し、本学の学生に配布している。また、参加者の報告書は80ページ以上におよび、プログラムの内容やEUの言語教育に関する研究成果について記述している。大学教員と大学院生らは、本プログラムについて全国レベルの学会（LET, JES, JACET, 2015等）または、国際学会（AESLA等）での発表を行い、プログラムの成果は量的・質的手法によって分析し、報告している。

成果検証

- (1) 記述式を含む事前と事後のアンケートを行い、参加者のグローバルコンペテンシー等に関する変容を分析している。アンケートからは、学生がCLILの実践授業のやりがいを感じており、授業では生徒の認知的思考を引き出すことで子どもたちと密接な接触を感じたことが明らかとなった。
- (2) 事前と事後のVersant英語習熟度テストを実施している。学生は全体に平均スコアを伸ばし、とりわけ4技能の中では英語の構文力に有意な伸びが見られた。

フォローアップと研究

実習先であるユバスキュラ大学はフィンランドでも最大の教育学部を備え、修士と博士のコースは英語で行われる。訪問中はCLIL研究で著名な応用言語学センターの外国語プログラムを代表するTarja Nikula教授の助言を受け、CLIL指導法とディスコース分析についても学んだ。Nikula教授は、CLIL指導法を応用した本プログラムの到達や展望についてプレゼンテーションを行った。また、本学の大学院生が、物理と英語のコラボレーションで「Soap Film and Surface Tension」（表面張力）と「Capacitors」（コンデンサー）のサイエンスCLILの実演を行った。続いて、2015年に、OKUはNikula氏を招聘し、本学の国際シンポジウムを開催した。フィンランドと日本と英語教育の発展へと協働が進む予定である。

オーボ・アカデミー大学と実習校では、校長のGun Jakobsson氏の助言で授業観察を行った。Jakobsson氏は2014年に本学を訪問し講演を行っている。学生は計5つの学級でCLIL訪問授業を行い、フィンランドの子供たちの意欲と知的興味を引き出した。また、担任の先生との省察で授業へのフィードバックを得た。Jakobsson氏から、フィンランドの教育改革、教育実習、CLILにおけるICT活用について学んだ。学生らは本プロジェクトを通して学んだことを報告書にまとめた。

プログラムの将来像

本プログラムは様々な国（フィンランド、スウェーデン、オーストリア、イタリア、韓国）における大学・小学校・中学校の教育機関との可能性を拡張してきている。これらの国々は日本よりも革新的な教育システムを構築しているが、取り分け理数教育のように、日本の教育の強みを生かすことで、本プログラムはグローバルにネットワーク化した環境において、世界の教師たちの繋がりを創ることに貢献することができると考えている。

プログラムを終了した学生は現在50名となり、大学院生は30代～40代前後の現職教員もおり、教育現場で指導的な役割をい。今後は本学の教職大学院に取り入れ、自治体教育委員会との連携を強めた上で、現職教員研修に応用することが可能であろう。

大学等名 国際基督教大学

プログラム型 双方向協定型、協定派遣（短期研修・研究型）／協定受入（短期研修・研究型）

（いずれかに○）

プログラム名 ICU 夏期留学プログラム

プログラムの概要（平成 27 年度実績見込）

プログラム実施期間 （1回の派遣／受入にかかる主な期間）	平成 27 年 6 月～8 月（3 週間～6 週間）
主な派遣先／受入国・地域（上位 3 カ国）	米国、英国、ドイツ、韓国、香港
主な派遣／受入校（上位 3 校）	カリフォルニア大学、ケンブリッジ大学、リーズ大学、ベルリン自由大学、高麗大学校、延世大学校、香港中文大学
プログラム全体の参加者数	27 名
海外留学支援制度奨学金受給者数	25 名
参加者の所属（在籍大学における学部・研究科・専攻／課程・学年）	教養学部 アーツ・サイエンス学科 2～4 年生
プログラム内容（講義／研究／実践等）	講義、グループワーク、フィールドワークなど
プログラムのウェブサイト	日本語：http://subsite.icu.ac.jp/ieeo/summerprogram.html 英語：http://subsite.icu.ac.jp/ieeo/summerprogram_e.html

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

プログラムの特徴・目的

ICU 夏期留学プログラムでは以下の 5 つのプログラムを運営している。いずれも世界各国から参加する教員や学生とともに学ぶ勉強の場にとどまらず、課外活動、寮生活等を通じて留学先の地域性を深く知り、異文化交流・異文化理解を深めることで、国際感覚を持った人材を育成することを目的としている。

プログラム名	研修先	期間	取得可能単位数	授業	第二外国語
イギリス文化研究	ケンブリッジ大学／リーズ大学	4 週間	5 単位	英語による多彩な授業が数多く開講。	不可
UC サマーセッションズ	カリフォルニア大学 パークレー校	6 週間	5～10 単位		不可
韓国サマープログラム	高麗大学校／延世大学校	6 週間	6～9 単位		韓国語を集中的に学ぶことも可
ドイツサマープログラム	ベルリン自由大学	4 週間	2～4 単位		ドイツ語を集中的に学ぶことも可
香港サマープログラム	香港中文大学	3 週間／5 週間	6 単位		中国語を集中的に学ぶことも可

< 応募の流れ >

夏期留学のプロセス（研修先大学によってスケジュールは異なります）

学年	時期	月	内容	
1年次以上	秋学期	10月	プログラム紹介・概要説明会	
		12月	応募説明会	
	冬学期			申請書提出
		1月		書類選考（TOEFLなどのスコア、申請時までの成績・留学目的についての英文エッセイなど） 面接選考
		2月		最終選考結果発表
				参加誓約書提出・参加申込金振込
		2月中旬～		研修先大学への願書など必要書類の提出
		3月上旬		第1回オリエンテーション
		3月～		研修校からの結果通知到着（ビザ申請、寮の申し込みなど渡航準備）
		春学期	5月	第2回オリエンテーション
2年次以上	夏休み	6月以降	留学	
	秋学期	9月	帰国後アンケート・報告書提出	
		10月～11月	研修先で修得した単位の編入手続き	
		10月以降	次年度プログラムへの協力（アドバイジング、帰国後報告）、交換留学応募、他	

いずれのプログラムも、それぞれの地域性を生かしたテーマのコースや、幅広い専門分野のコースが英語で開講されている。それらの講義は協定校の教員、もしくは海外の著名な大学から招聘された教授陣により行われている。専門分野の学問知識を深めることはもちろん、韓国語・中国語・ドイツ語も集中的に学ぶことができる。

プログラムの達成目標

- 短期間ではあるが、世界トップレベルの授業を留学先にて履修することができるため、そこで得た経験と自信を、将来の交換留学プログラムへの参加や海外の大学院進学など長期留学へのステップとする。
- 本学では開講されていない分野のコースを受講する良い機会とし、受講後、専門分野の研究への足がかりのひとつとする。
- さまざまなバックグラウンドを持つ参加者と受ける講義のなかでディスカッションやプレゼンテーションなどを行うことを通じて自分の考えをまとめ、的確に意見を述べる能力を身につけ、帰国後も本学での授業へのより積極的な参加につなげる。
- 歴史、文化、時事などに関連した講義など、地域性を生かしたプログラムに参加することで留学先をより深く学び、国際感覚を磨く。
- 現地学生や世界中から集まる学生と共に授業受け、寮生活や課外活動、フィールドトリップを経験することを通し、世界を多角的に新しい視点から見つめる力を養うと同時に、異文化を受け入れる姿勢を身につける。
- 渡航手続き（アメリカの場合は学生ビザ申請も必要となる）などを自ら行うことや寮生活を通して、自立心を養う。
- 英語による授業を通し、英語力のさらなる向上を目指す。また、韓国語・中国語・ドイツ語を履修する学生は、現地で生きた言語を短期間で効果的に学ぶ。
- 夏期休暇期間中に正規科目もしくは同等の質の専門科目を、単位取得を目的に履修する。

2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

プログラム参加者の評価

外国語を集中的に学んだ学生は短期間に効率よく語学力が向上し、帰国後も継続して学習したい、等報告している。また専門科目を学んだ学生には、帰国後本学で英語開講の授業を受講することへの自信につながっていること、さらに長期の留学へ挑戦することを計画している学生が多く見られた。同時に今後の進路に関し、具体的な視野を持つことができるようになった、と報告している学生もいるので、当プログラムへの参加が確実に将来につながるステップになっていることが確認されている。



香港中文大学

フォローアップ・成果検証の実施

参加学生には、参加報告書（日英可、A4 サイズ 2 枚以上）の提出、帰国後アンケートの回答、プログラム終了後にフォローアップミーティングへの出席を求め、プログラム全体に対するフィードバック、プログラム内容の振り返り、現地の情報共有、派遣前後の意識の変化や参加したことで得た成果について確認を行なっている。



プログラムの将来像



カリフォルニア大学

毎年、本学で 10 月に開催している『夏期留学プログラム・フェア』において参加学生は体験談を次年度参加希望者と共有する機会があり、次年度につながる継続したプログラムとしての安定化に寄与している。また、応募説明会等で、プログラム内容について発表を行なうので縦のつながりも充実したプログラムとしての位置づけを固めつつある。

今後も学生の海外留学の多様な選択肢の一つとして、また一年の長期留学や、卒業後の海外大学院進学へのステップとして、このプログラムを継続的に発展させていきたい。

大学等名 国立大学法人 宮崎大学

プログラム型 双方向協定型 **協定派遣（短期研修・研究型）** / 協定受入（短期研修・研究型）
 (いずれかに○)

プログラム名 学士-修士一貫型グローバルな海洋科学技術者育成プログラム

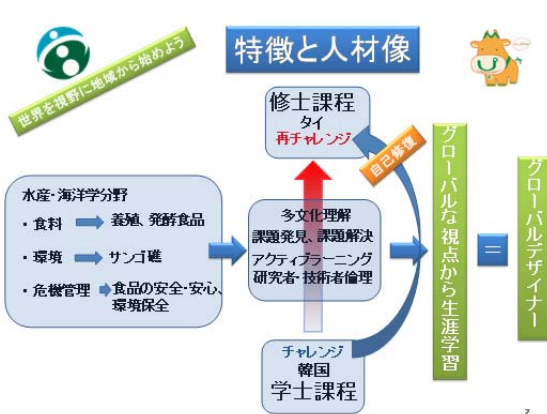
プログラムの概要（平成 27 年度実績見込）

プログラム実施期間 (1回の派遣/受入にかかる主な期間)	平成 27 年 11 月～平成 28 年 3 月 (約 20 日間) (タイ並びに韓国への 2 回派遣)
主な派遣先/受入国・地域 (上位 3 カ国)	タイ、韓国
主な派遣/受入校 (上位 3 校)	プリンス・オブ・ソンクラ大学 (タイ)、釜慶大學 (韓国)
プログラム全体の参加者数	13 名
海外留学支援制度奨学金受給者数	13 名
参加者の所属 (在籍大学における学部・研究科・専攻/課程・学年)	農学部農学研究科修士 1 年、農学部海洋生物環境学科 3～4 年
プログラム内容 (講義/研究/実践等)	学術セミナー、フィールドトリップ、グループワーク
プログラムのウェブサイト	

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

1. 特徴

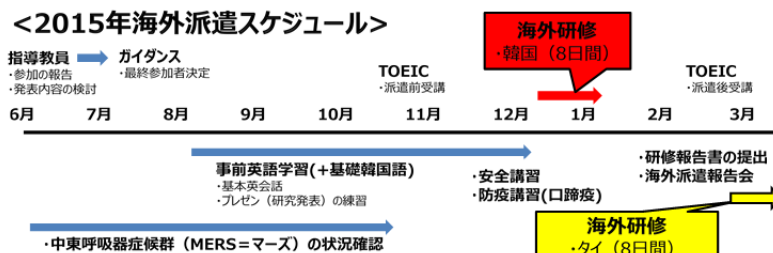
本プログラムの目的は、「**海洋環境と水産物の持続的生産と有効利用を担うグローバル人材**」を学部・大学院一貫教育で育成することである。特徴はアジアでも有数の水産資源供給国である韓国とタイへそれぞれ学部生並びに修士生を派遣しグローバル人材を育成し、**学士-修士一貫したグローバル人材育成カリキュラム**を構築する。また**両国は継続性を有した派遣プログラムを実施する上で、地の利を得ている**。このような活動を通して、生涯学習ができるグローバル人材を育成することが本プログラムの骨子であり、海洋環境保全と安全・安心な水産食品に関するアジアでの教育拠点の構築を目指す。



本プログラム参加学生の達成目標は以下の能力を獲得である。

- 1) **海洋・水産分野**の深い知識の修得とそれに基づく**課題発見・解決能力**
- 2) グローバル化する食品の安全性・越境性**疾病問題**に対する**危機管理能力**を備え、**チャレンジ精神**をもって活躍できる能力。
- 3) 公共機関や NPO など国際社会での**指導的な役割**を果たすために必要な**英語力を備えた能力**。
- 4) グローバル化時代に必要な**研究者・技術者倫理**を備え、**異文化理解**ができる能力。
- 5) グローバルな視点で主体性を持ち、**生涯を通じて学習**できる能力
- 6) **アジアを拠点**とし、**水産資源諸課題の解決**に積極的に取り組む能力。

2. プログラム全体のタイムスケジュール



2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

1. 学習成果の評価について

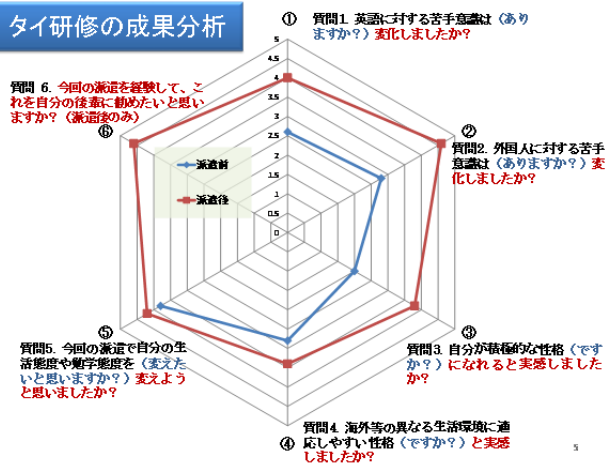
学部学生および修士学生のいずれも本研修は単位化される。

- 1) 学部学生では「専門英語」2単位として認定される。
- 2) 修士学生では、修士課程の「サイエンス・コミュニケーションⅠ」2単位として認定される。
- 3) 評価は学部学生および修士学生ともに、研修先におけるプレゼンに対する日本人教員と派遣先担当教員によって評価する。
- 4) 評価項目は平成26年度の派遣で用いた評価表を統一して用いる。平成26年に本評価を実施し、良好な結果が得られた。

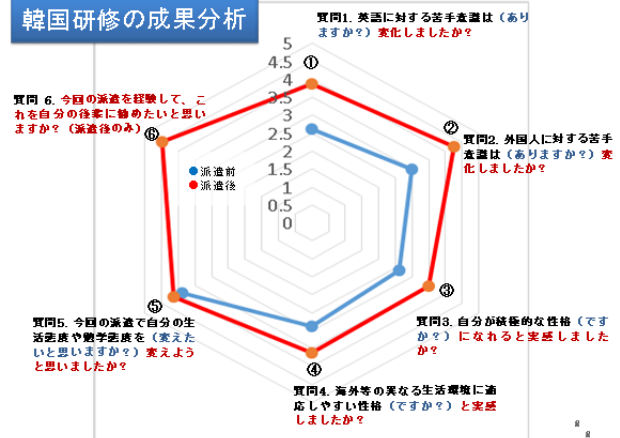
派遣前に**事前英語学習**を行った上で、派遣先での英語でのセミナー発表を実施した。このことで英語学習効果を高め、更に研修前後で**TOEFLを受験**させ、英語能力スキルアップへの本プログラムの効果についても客観的に評価した。このように**英語学習に重点**を置きながら、学術セミナーへの参加により、**学部生は修士への、修士生は博士への進学の意識づけ**を行う。

研修前後でアンケート調査を行い、プログラムの効果について成果分析を行った（下図）。参加学生による「**報告会**」を開催し、部局内外に本プログラムの成果を周知する。

タイ研修の成果分析



韓国研修の成果分析



2. プログラムの評価について：

- ・本プログラムは学部生、修士生の両方を対象に単位を付与することから、学科及び専攻での教育改善協委員会が**PDCAサイクル**のチェック機能を果たしている。更に平成25年度のプログラムで学部学生として韓国に派遣した学生が、翌年度では修士生としてタイへの派遣プログラムに参加している。このことから本プログラムの特色である、学士-修士一貫プログラムの効果を検証できる。
- ・したがって、当該委員会が前述の成果検証結果やフォローアッププログラムの推移を**客観的に**検証する体制が整備されている。
- ・参加学生の最終とりまとめの一環として、研修に対する**学生からの提言**を受ける。

【今後の展望】

学部生・修士生を対象とした派遣事業を継続する。更に平成27年度以降は、**学部次に韓国への派遣を経験した学生が、修士生としてタイへ派遣され、学士-修士一貫プログラムの成果が確認**できる。また既に本短期派遣事業を通して、**修士並びに博士課程に進学する学生数が増加**しており、**一貫型グローバルな海洋技術者育成プログラム**の効果が認められる。今後は学士-修士一貫型のプログラムに基づく博士課程進学を促進させる。このことで、グローバル化に根ざした高度な研究を実施するために進学を志向するようになる。更に学士-修士一貫型の教育プログラムをより発展させるため、**タイ-韓国-日本による三カ国合同セミナー**も開催する。

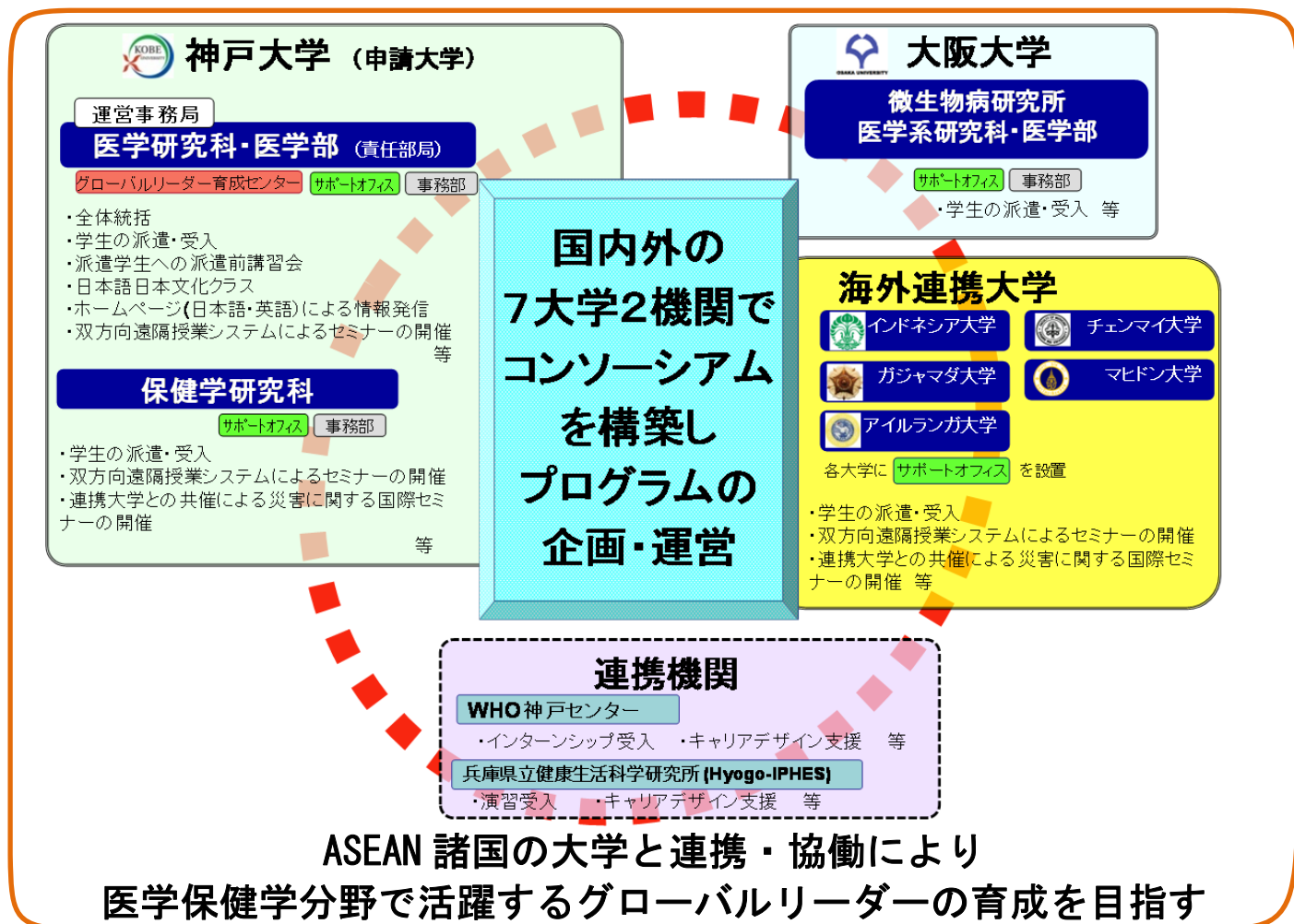
大学等名 神戸大学（代表校）、大阪大学

プログラム型 双方向協定型／協定派遣（短期研修・研究型）**協定受入（短期研修・研究型）**
（いずれかに○）

プログラム名 大学の世界展開力強化事業 I（ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成）

プログラムの概要（平成 27 年度実績見込）	
プログラム実施期間 （1 回の受入にかかる主な期間）	病院実習プログラム：4 週間、研究プログラム：2 または 3 か月間、学位取得プログラム：3 または 4 年間
主な受入国・地域（上位 3 カ国）	インドネシア、タイ、バングラディッシュ
主な受入校（上位 3 校）	マヒドン大学、インドネシア大学、アイルランガ大学
プログラム全体の参加者数	42 人（2 月 26 日現在）
海外留学支援制度奨学金受給者数	33 人
参加者の所属（在籍大学における学部・研究科・専攻／課程・学年）	医学部・看護学部：U 3～6 年、M・D 全学年
プログラム内容（講義／研究／実践等）	単位認定プログラム（病院実習/研究プログラム）、学位取得プログラム
プログラムのウェブサイト	【日本語】 http://www.med.kobe-u.ac.jp/asean/index.html 【英語】 http://www.med.kobe-u.ac.jp/asean/en/index.html

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

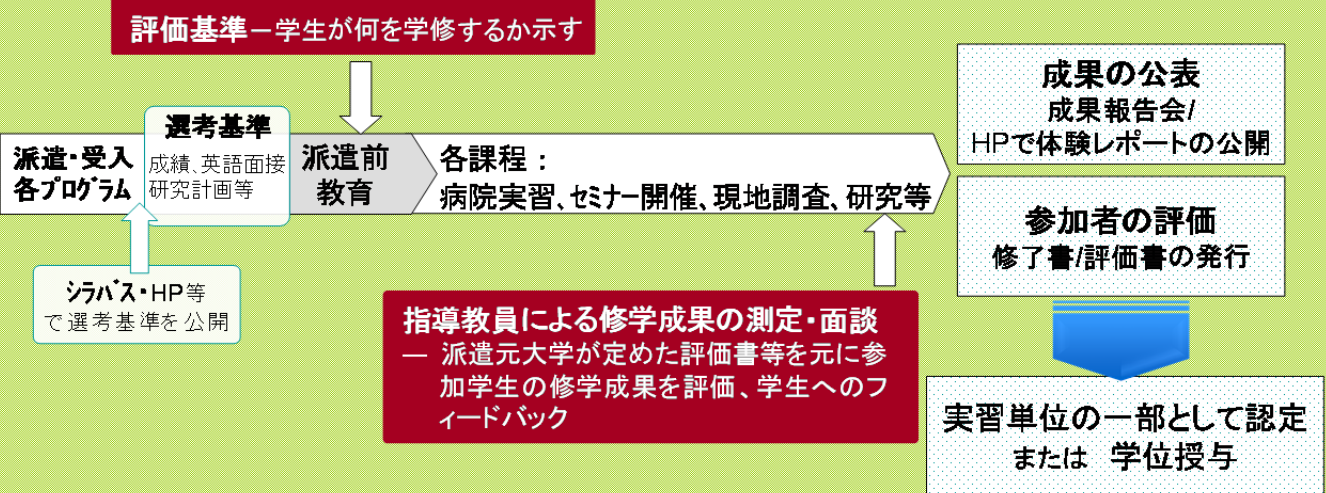




参加学生の専攻・課程に応じた様々な交流プログラムを提供する

2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

プログラム参加者の評価・成果の公表



プログラムの評価・将来性

内部での評価

コンソーシアム運営委員会

- ・人材育成の目的と目標の共有
- ・プログラム運営、学生支援等に係る情報共有、必要な事項の協議
- ・カリキュラム、シラバス、成績基準、単位認定、修了判定等に係る協議
- ・自己検証・評価、質の保証と向上を図る 等

各部局ワーキング委員会

- ・部局プログラム運営
- ・部局間情報共有及び連絡調整 等

サポートオフィス

- ・日本の学生派遣及び留学生受入のための環境整備
- ・環境整備に係る情報共有 等

外部からの評価

外部評価委員会

- 外部の有識者による
- ・検証・評価
- ・教育の質の保証 等

プログラムの発展・改善

- ・ダブルディグリープログラムの実施に向け協議
- ・Elective Programの開設による学生の受入 等

大学等名 広島市立大学

プログラム型 双方向協定型／協定派遣（短期研修・研究型）／協定受入（短期研修・研究型）
（いずれかに○）

プログラム名 Intensive Summer Course HIROSHIMA and PEACE (H&P) 2015

プログラムの概要（平成 27 年度実績見込）

プログラム実施期間 （1 回の派遣／受入にかかる主な期間）	平成 27 年 7 月 29 日～8 月 7 日（10 日間）
主な派遣先／受入国・地域（上位 3 カ国）	米国、シンガポール、中国
主な派遣／受入校（上位 3 校）	ハワイ大学、シンガポール国立大学、国際関係学院（中国）
プログラム全体の参加者数	36 名
海外留学支援制度奨学金受給者数	8 名
参加者の所属（在籍大学における学部・研究科・専攻／課程・学年）	学部 2 年生以上、大学院博士前期課程、後期課程（修了者、社会人も含む） 学部は文系/理系問わず全学部/研究科が対象であり、例年幅広い参加が見られる。
プログラム内容（講義／研究／実践等）	講義、フィールドツアーなど
プログラムのウェブサイト	http://www.hiroshima-cu.ac.jp/Hiroshima-and-Peace/index.htm

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

1. プログラムの趣旨・目的・達成目標等

夏期集中講座「ヒロシマと平和」（Intensive Summer Course HIROSHIMA and PEACE）（以下、「H & P」という。）は、国際平和文化都市・広島において、平和に関する諸問題を学際的に取り上げ、英語での講義（オムニバス形式）と議論を通じて、本学及び国内外からの参加学生に「平和とは何か」を深く考えるよう促すプログラムである。世界から広島市立大学に集った参加者が、広島市立大学の学生と共に、平和について語り、学び合い、そして友として交流する。

プログラムには、平和学、国際政治学、紛争解決論、文学、社会学、経済学など多様な観点から行われる学内外講師による学際的な学部・大学院レベルの講義と、広島ならではの被爆者証言、平和祈念式典への参加、市長との懇談などのフィールドワークが組み込まれている。学外参加者は理系文系問わず様々な関心を持つ学生、そして社会人である。

最も平和への思いを熱くする 8 月 6 日を挟んだ時期の広島の人、土地、雰囲気と直接触れることができると共に、異なる文化的・思想的背景を持ちながらも平和への思いを共にする仲間同士の交流が、このプログラム最大の特徴である。また、協定校以外からの応募・参加が多いことも、本プログラムの特徴である。これまで延べ 46 カ国から、学生以外にも、ジャーナリスト、大学教員、医師、国家公務員、芸術家といった社会人も参加している。

なお、本プログラムの目標は、プログラム参加を通じて学生の平和意識の醸成を図り、核兵器の不拡散、核廃絶、平和構築などといった平和に関する諸問題等に取り組む人びとを増やすことである。

2. プログラムの流れ

2 月) 海外・学外募集開始 4 月) 学内募集・学内研修プログラム開始 5 月) 海外・学外参加者決定
6 月) リーディング・マテリアル配布 7 月) ホームステイ等確保、本プログラム開始（～8 月上旬）
9 月) 報告書作成 10 月) 次年度準備開始

2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

1. 学習成果の評価について

学外からは例年定員の2倍程度の応募があり、エッセーなどの書類審査で選考が行われる。学内生については、加えて語学力が選考基準に加えられる。評価は基本的に最終日に行われる最終試験（ペーパーテスト）を中心に、講義における議論への参加度合い、フィールドトリップでの活動などを加味して行われる。プログラムを修了した学生に対しては、学内生が事前研修プログラムを加えて4単位、本プログラムのみ受講する学外生には3単位が付与される。

本学協定校であるハワイ大学では、正規プログラムの単位が付与される。協定校からの参加は3割程度であることもあって、その他大学との単位互換については相手校の判断に任せている。

プログラム参加前後の効果については、プログラムの冒頭及び最後に行われる「平和とは何か」という質問に対する回答を記録に残し、プログラム期間前後における参加者の意識変化を定性的に記録している。加えて、最終試験でも、そうした意識変化を評価している。また、本プログラムの終了時に、全参加者に対するアンケートを実施し、参加者の意識変化やプログラム評価についての測定を行っている。アンケート結果は委員会において検証し、次年度以降のプログラム改善資料として用いられると共に、報告書にもその結果を掲載している。

参加後はfacebookやTwitterといったSNSなどで自主的な参加者間のネットワーク形成・交流が行われている。また、H&P参加は、本学学生には留学や海外研修参加、海外参加者には大学院進学など、さらなる取組みへのきっかけともなっている。

2. プログラムの評価について

2003年の発足以来、着実に経験を重ねてきたH&Pは、今や広島市立大学国際学部の看板プログラムとして定着したとあって良い。当初有志教員の手弁当でスタートしたH&Pは、その後担当者を学部の正式な委員会によって構成することになり、学部のみならず、後援会も含めた全学からのサポートが得られるようになった。毎年実施しているアンケートでは、例年参加者の90%以上から高い満足度評価を得てきたことも、担当者にとっては励みとなっている。

とはいえ、一学年100名という小規模学部にとって、講義のみならずホームステイ手配なども含めた本プログラムの実施負担は決して小さくなく、加えて近年期末試験時期が本プログラム実施時期と重複するようになったことから、全学的な協力の必要性が増している。近年の厳しい財政状況の中、事務スタッフの安定的確保も重要な課題である。このような現実をふまえると、本学規模の大学にとって、プログラムの規模拡大は現実的ではなく、むしろ手作りの良さ、高い質をいかに維持し続けるかが重要であると考えている。

そうした中、来年度JASSO奨学金が得られなかったことは極めて残念であるが、一方で広島市からは高い評価を得ることができた。結果、広島市の平和連帯推進課、広島平和文化センターの協力による参加者に対する支援制度の発足は、今後の本プログラムにとって明るい材料である。

大学等名 北海道情報大学

プログラム型 双方向協定型／協定派遣（短期研修・研究型）／協定受入（短期研修・研究型）
（いずれかに○）

プログラム名 Web デザインコンテストによる技術文化の相互啓発で育つグローバル人材

プログラムの概要（平成 27 年度実績見込）

プログラム実施期間 （1 回の派遣／受入にかかる主な期間）	[受]平成 27 年 8 月 24 日～平成 27 年 8 月 31 日（8 日間）
主な派遣先／受入国・地域（上位 3 カ国）	[受] タイ
主な派遣／受入校（上位 3 校）	[受] ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校
プログラム全体の参加者数	[受] 8 人
海外留学支援制度奨学金受給者数	[受] 7 人
参加者の所属（在籍大学における学部・研究科・専攻／課程・学年）	Engineering/Computer Engineering 2 年, Science and Technology/Computer Science 3 年, Mass Communication Technology/Multimedia Technology; Digital Media Technology 1～2 年
プログラム内容（講義／研究／実践等）	[受] 講義, グループワーク
プログラムのウェブサイト	英語 facebook: 2015 Int'l Collaboration HIU/Japan & RMUTT/Thai タイ語: http://www.hiu.rmutt.ac.th/

1. プログラムの特徴、目的・達成目標

本プログラムは、本学とタイ王国・ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校（RMUTT）の学生による共同制作作業を伴う相互啓発プログラムであり、両大学間の国際 Web デザインコンテストを基盤とする学生交流である。両大学がそれぞれ全学生を対象とする学内の WEB デザインコンテスト（WDC）を実施し、優秀な作品を国際 WEB コンテスト（iWDC）応募作品とする。これらの作品を制作した学生に対し、相手国の文化・歴史、英語コミュニケーション力、渡航指導等の講義を行った上で相互に派遣し、それぞれの国で 8 日間の Web 作品制作ワークショップを連続して行う。ワークショップでは、国際コンテストの表彰式も行い、学生の文化交流も行う。これにより、国際社会に通用するコミュニケーション力や協調性を備えたグローバル人材を育成する約 1 年間の教育プログラムである。

目的

「相互の文化比較と理解」をテーマとする Web 作品をグループごとに共同制作し、それぞれの国の文化を理解し、深い友情に根ざした次の時代を担うグローバル人材を育成する。

4 つの達成目標

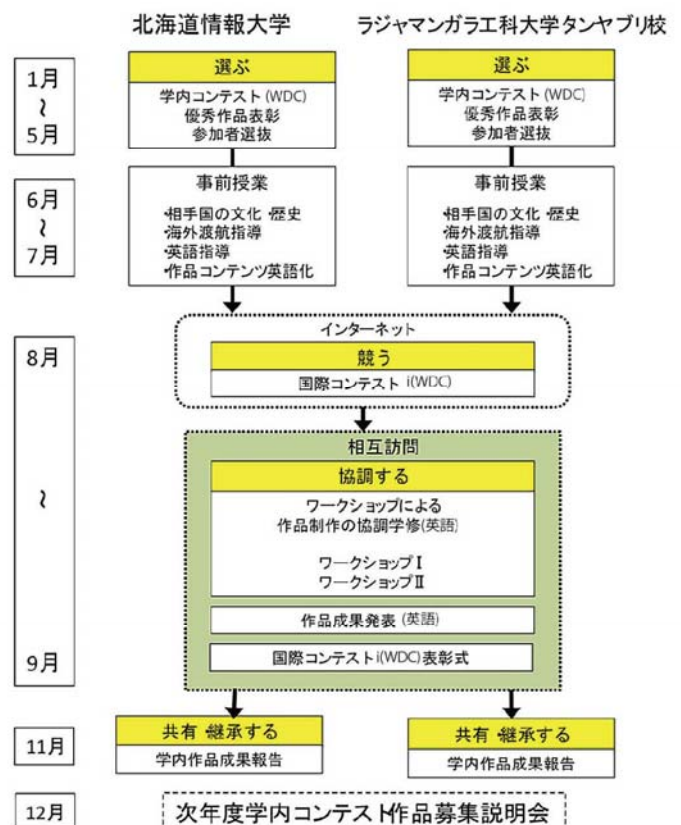
1. Web 技術、コンテンツ表現力を向上させる。
2. グローバルコミュニケーション力を向上させる。
3. 相互の文化を深く理解する。
4. 学生相互の友情を育む。

iWDC モデル

「選ぶ」、「競う」、「協調する」、「共有・継承する」の 4 つの要素に基づくプログラム

↓
他の ICT 分野へ波及

iWDC モデルとプログラム実施の流れ



2. プログラム参加者の評価、フォローアップ・成果検証の実施、プログラムの将来像

〔単位取得の必要条件〕

ワークショップ参加，事前の英語指導，相手国の文化・歴史の学習，海外渡航指導，レポート，SNS を用いた Web 制作に関する時間外学習活動など

〔成績評価〕

ワークショップ等について，両大学の成績評価担当教員 5 名が 5 つの評価観点と，作品評価については，さらに 7 つの観点から評価する。

〔成績評価会議〕

成績評価をもとに，両大学教員が参加する成績会議で成績評価を決める。RMUTT の認定単位数は，3 単位である。

〔学習効果を高めるための工夫 - Active Learning〕

本学と RMUTT の学生 2 名ずつからなる 4 人のチームにより，「相互の文化比較と理解」のテーマのもと，各チームで具体的なトピックを考え，Web 作品を制作する。共通の言語は両国学生にとって第 2 言語である英語である。これにより，Web 技術の切磋琢磨，グローバルコミュニケーション力育成，信頼関係に基づく深い友情の涵養を目指す。

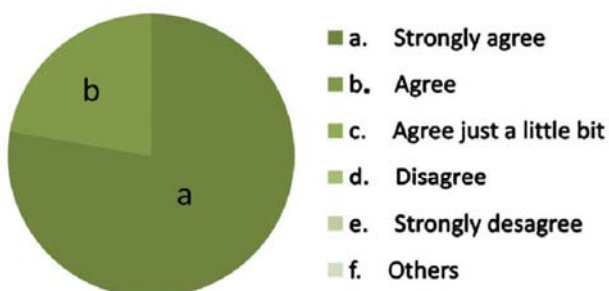
〔効果測定と意識変化の把握〕

プログラムに参加する学生に対しては，これまでアンケートやレポートにより，意識の変化を調査してきた。調査の観点は，本プログラムの達成目標 4 項目が中心であるが，自由記述による意識の変化も把握している。

〔評価観点〕

1. Evaluation of their piece of work
 - 1-1 First Impression
 - 1-2 Idea/Concept
 - 1-3 Volume
 - 1-4 Graphic Design
 - 1-5 User Experience
 - 1-6 Technical Skill
 - 1-7 Own Contents: copyright, existence or non-existence of a reference list
2. English expression
3. effort of trying to understand the each other's culture
4. share their work appropriately
5. Harmony and friendship between members in the group

Do you want to work with foreign people?



	Was your English communication skill improved?	Was your web-making skill improved?
a. Strongly agree	18%	61%
b. Agree	65%	39%
c. Agree just a little bit	18%	0%
d. Disagree	0%	0%
e. Strongly disagree	0%	0%
f. Others	0%	0%

< 自由記述から抜粋 >

- I think it's a very good idea, because living in different culture will help me see things from different point of view. I think it will help me better in what I learn and it's a very good opportunity to exchange idea from different point of view. I think it interesting because it combine two perspective to create idea together.

- I think this exchange. It was the best for me. I gained the experience to work, cultural exchange and make new friends. I sincerely hope to having this project in next several years. Thanks for this great occasion.

- I think this program is great. I got a lot of experiences and learnt many things from group working, from friends, from city expsacially I learnt about the different culuture. I think the most important thing that I got froma this program I learnt about the different attitude from the people. Attitude is more important than culuture because it's thinking of people that make each person different. I lerant this and my thinking process have been developed.

〔プログラムの評価と今後の発展〕

両大学の学長，教職員をはじめ，学内外から本プログラムへの評価が高まったため，本プログラムの本質を iWDC モデルで表し，他の ICT 分野への波及を図っている。また，RMUTT の本プログラム出身学生が RMUTT 教職員として採用されており，彼らが本プログラムの指導者になる希望を持っている。このような発展から，単なる留学交流プログラムの枠を超えた両大学に跨るメタ・スクールの可能性を模索している。